

日本スポーツ社会学会会報

第12号

Sport sociology

日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局：九州大学 1995.11.20

目次

《訃報》	1
《追悼の辞》	2
《諸報告》	4
1. 理事会報告	
2. 編集委員会の業務報告	
3. 研究委員会報告	
4. 事務局報告	
《日本スポーツ社会学会第5回大会案内》	9
1. 日本スポーツ社会学会第5回大会開催要項	
2. 特別企画およびシンポジウムについて	
3. 学会研究委員会企画シンポジウム概要	
《特別寄稿》	11
《研究通信》	15
《リプライ》	21
《海外学会通信》	23
《会員の動静》	25
《編集後記》	27

スポーツ・ルール学 への序章

●中村敏雄 著

【主要目次】第一章=「勝つことを目的」考—野球(奇妙なルール／アメリカのフェアプレー／八百長試合…)
第二章=ルールの文化化—フットボール(勝敗製ボールのなぞ／手の使用／スロー・インの方法…)
第三章=アピール—プレーの自己統治(アピール／プレー／競技から競技へ…)
第四章=スポーツがわかる—スポーツルール学への招待(変化するスポーツ／スポーツ観を変える…)

●四六判・上製・250頁 定価1,957円



歴史の目で日本のスポーツの 「いま」を問う! 日本の スポーツ環境 批判

●中村敏雄 著

社会とともにスポーツもまた激しく変化・変貌する今日、『スポーツ環境学』の必要性を提唱しつつ、あるべき「部活」への構図をするべく描く。

●四六判・258頁 定価1,957円

スポーツ・ マネジメント

●ボニー・パークハウス 編著

●日本スポーツ産業学会 訳

社会の中でスポーツの役割や機能が増すにつれ、スポーツを商品とするビジネス的側面が急速に増えてきた。そのため、専門的なビジネス・マネジメントの手法をスポーツ領域でも確立する必要があり、スポーツ分野の会計と予算、経済学、法律、コミュニケーション、マーケティング、経営管理、倫理問題など、その研究と実践を集めて理論と応用の両面から記述した先駆的な書。

●B5判・上製・296頁 定価3,605円



〈スポーツ界の鬼才が放つ待望の書!〉 スポーツ フィールドノート

●松浦健四郎 著

スポーツ界の鬼才が日本スポーツの深層に迫る。その筆法は鋭いが、スポーツを愛する讀者の眞情が詰むもののみを打つ。「体育科教育」、「連載中から1冊にまとめてられる」とか待ち望まれていた状況。

【主要目次】

- I タレント栽培 著者記
- II 組織改進便
- III スポーツ人類学への招待
- IV 国際化時代のスポーツ文化
- V 現代スポーツの死角 ほか

●四六判・192頁 定価1,339円

企業・スポーツ・ 自然

—株式会社ニッポンのスポーツ
等々力賀治 著

スポーツが政治や企業に利用されていることを排し、人々の生活を豊かな文化として発展することを願う立場から日本スポーツの在り方を問い合わせる。

●四六判・274頁 定価2,060円

現代社会と スポーツ

Sport in Society

P.C.マッキントッシュ 著
寺島善一・岡尾恵市・森川貞夫 編訳

スポーツ発祥の地イギリスの土壤にたつ著者の広く深い洞察により、スポーツと政治、余暇、アマとプロ等の問題が鋭く抉られていく。

●A5判・240頁 定価1,800円

スペクティ スポーツ

—20世紀アメリカスポーツの軌跡

ベンジャミン・レイダー 著
川口智久 監訳・平井 譯

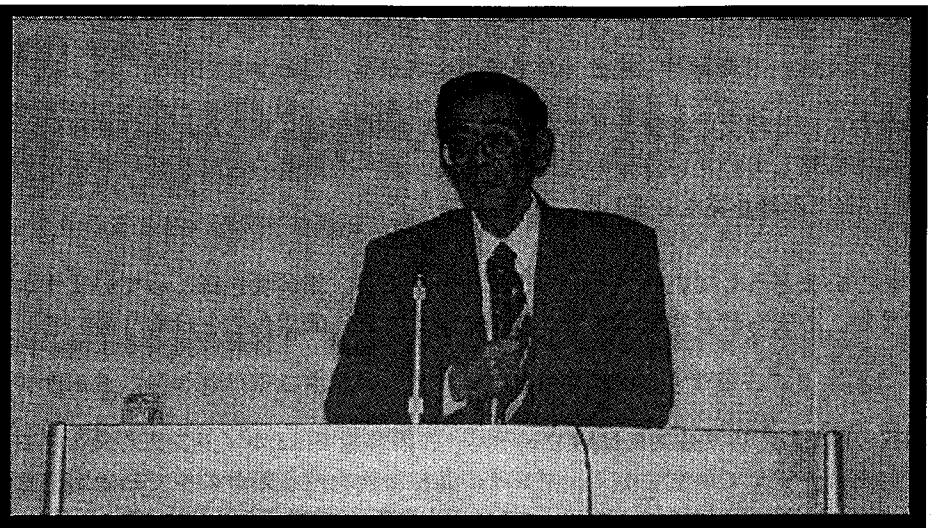
多くのスポーツヒーローを輩出させた1920年代から、スペクティースポーツ(見るスポーツ)主流の1980年代に至るアメリカスポーツの社会史。

●A5判・282頁 定価2,575円

大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 ☎03-3294-2221㈹

訃報



在りし日の故多々納秀雄先生

本学会理事で事務局長であった九州大学教授多々納秀雄先生は、平成7年9月9日未明突然永眠されました。享年49歳でした。

先生はスポーツの概念規定に関する研究や、文化としてのスポーツモデルの構築など初期の研究においては、T.パーソンズ理論の摂取とそのスポーツへの適用に多大なエネルギーを費やされ、数多くの優れた研究成果を残されました。また、理論研究のみならず、スポーツ行動の分析や国際比較調査などに、体育・スポーツの研究者としてはかなりはやい時期に多変量解析の技法を適用するなど、多方面で質の高い研究成果を蓄積なさいました。近年では武道の社会学的研究に関心をお寄せになっておられましたが、志半ばにして逝去されました。

また学会では、本学会理事・事務局長、日本体育学会評議員、九州体育学会理事など多くの役職でご活躍になられました。ことにユニバーシアード福岡大会では、大会式典専門委員、大学スポーツ研究会議専門委員をおつとめになり、大会を成功へと導かれました。同大会研究会議における世界の大学体育の現状についてのご報告が、最後の舞台となりました。

体育・スポーツ社会学の学問的発展に超人的な貢献をされ、スポーツ社会学会のこれからになくてはならない人材を亡くしたことを心から残念に思うとともに、長い間の病魔との戦いにお疲れになられたであろうことを思い、「多々納先生有り難う。どうぞ安らかにお眠りください。」と声をかけてあげたいと思います。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(事務局 山本記)

追悼の辞

同士 多々納秀雄の思い出

山本清洋（度児島大学）

学会事務局からの追悼文の要請を承諾し随分と長い時間が経ちました。本日事務局から最後通牒を貰い、それでも黙していたい自分の気持ちを抑え、君への最後の言葉を形にするために、レクイエムニ短調k.626で部屋を充たしました。

多々納さん、いまどうしていますか。そこには鳥が舞い、花が咲きほこっていますか。学問を語る人がいますか。心安らげる空間ですか。私が見えますか。休蔵先生とはもう会いましたか。二人で何を話していますか。

大学院時代の前半は、方法論的にはM.ウェーバー、内容論ではJ.ホイジンガやR.カイヨアのプレイ論の時代でしたね。覚えていますか？ プレイの非日常性を巡る論争の中で結論が出なくて（今も定説はないのですが）「しようもないな、アフリカに行ってアゴンとアレアを捕獲しよう。きっと、非日常性が説けるかもしれない」と語っていたことを。このような冗談での結論のつけ方は、非日常性という哲学的問題を現実社会の実体として操作することを追求するという意志の表現でした。また、なぜ〈アフリカへ〉なのか、という解は、異なる文化とプレイの非日常性の関連の追求であり、また異文化を越えるスポーツ概念の構築ということでした。論争に疲れ、休憩宣言をするのに「アフリカだよな、そうアフリカだよ」といっていた若い時代が鮮明に想起されます。君のこの思いは、現代の体育を考えるに必修の理論となった「楽しい体育の批判的検討」（1989）に発展しました。

後半のある授業で、多々納さんが当時体育関係者には聞き慣れないT.パーソンズの構造機能分析を提示し、その有効性を論じたのは余りにも強烈な印象でした。君がT.パーソンズ理論を提示している時の、竹之下休蔵先生があの苦虫を噛みつぶしたような顔を、何とも例えようもない複雑な顔へと変えられたのはある意味で痛快でした。当時、M.ウェーバーの社会行動を枠組みとしたレジャー行動の分析に限界を感じていた私にとっては眼の鱗が落ちるほどの展望でした。その後、紹介された著書（行為の総合理論をめざして）を読み、二人して社会学会や教育社会学会の構造機能分析に関する論文の収集に奔走し、大学院終了後、少なくとも6年間は富永健一、吉田民人、小室直樹等の学会発表を聞き回りましたね。多々納さんがどの様にしてパーソンズ理論に巡り会ったかは、当初分かりませんでした。しかし、後に分かったことですが、新明正道一菅原禮という流れが当時の体育社会学研究室に在ったんですよね。只この流れは、「アフリカ、アフリカ」といって満足していたものは気付き得ないものでした。多々納さんが気付き得た源流が学生時代の卒業論文にあることに気付いたのは、パーソンズを長らく語る過程でやっと分かったことでした。

また、当時、竹之下先生は学校体育に関する研究会を多くの先輩を交え開いておられました。しかし、多々納さんは、自分はスポーツ社会学の徒であり、その修行をしているから参加する必要はないと言はず、社会学関連の著を読んでいましたね。この学問へのひたむきな姿勢に多くを学び、同調したのも痛快な思い出です。

卒業後の3年間の出来事の秀逸は2人学会でしょう。発表者一人、聴取者一人、発表時間2時間、質疑応答2時間。会場福岡・岡山。プレイ論、社会学理論、科学論、が主でしたが、もう2度とやりたくないなと思えるほどの激しいやり取りが、今となると再開したい熱望をもって懐かしく思い出されます。もちろん、この学会（？）を仕掛けたのも貴方でした。ありがとうございます。

その後、二人の研究対象と方法はその方向を変えたことから、彼の学問を底流するその後の部分は分からぬが、只、次の言葉は強烈に自分の中に生きています。彼は長年、人工透析を受けていました。透析を受け始めた初期の頃、「山本さん、透析を受けるようになって、かえって勉強出来るようになったよ。透析を終え、家に帰り、床に就くと早朝に眼が醒めるもんね。それから大学に出かけるまで勉強たい」と。

もちろん、眼に見える彼の研究の足跡は、自分を含め広く世界のスポーツ社会学研究者の知るところです。

天の地に居る同士多々納秀雄君！ 私は声を大にして叫ぶ。君はスポーツ社会学会、日本の体育学会の財産であった。その君が残した思想と学問への真摯な生き方を財産として継承していくことを。

合掌

諸報告

1. 理事会報告

第Ⅲ期 第2回理事会

10月6日(金) 16時~19時 早稲田大学人間総合研究センター分室2階A会議室

出席者…池井 望(会長)、宮内孝知、平野秀秋、上杉正幸、生沼芳弘、菊 幸一、

中島信博(オブザーバー)、山本教人(オブザーバー)

欠席者…松村和則、伊藤公雄、山下高行、荒井貞光

<議題>

1. 理事の役割分担の変更

- 理事長…平野秀秋理事から宮内孝知理事へ変更する。
- 事務局…事務局長を三本松正敏会員(福岡教育大学)にお願いし、会長指名理事に選出する。事務局員は、従来通り山本教人、吉田 毅(九州大学)、松尾哲矢会員(福岡大学)にお願いする。
- 会計担当理事…松村和則理事(筑波大学)にお願いする。
- 監事…近藤義忠会員(宮城教育大学)、厨 義弘会員(福岡教育大学)にお願いする。

2. 第5回大会の日程およびシンポジウムについて

- 中島会員から資料をもとに説明を受け、企画・日程等について了承する。この件は、本来、理事会の審議事項ではないが、外部招聘演者との絡みで内容の詳細について説明を受けた。
- 外部招聘演者については、参加費や広告費等の工夫によって、なるべく実行委員会の側で自助努力をしていただく。どうしてもやむをえぬ場合は、特例として学会予算の予備費から捻出することを再度検討する。
- 研究委員会主催のシンポジウムは、(理事会後)吉見氏の快諾を得たので、山下、菊会員を加えた3名の演者は予定通り決定した。
- 松村氏推薦のJ. Mandle氏の扱いについては、内容によってシンポジウムの演者に加えるか、特別講演とするかを決定する。決定し次第、事務局、実行委員会に報告する。

3. 第6回大会における研究委員会シンポジウムの開催に向けて

- 9月末に山下、菊理事によるフランス、イギリスへの下交渉の模様を資料により説明を受け、国際シンポジウム開催に向けた資金の捻出と外国人研究者招聘のあらゆる公的機会を生かす重要性を確認。さらに、ドイツ、アメリカ、カナダやアジア諸国への呼びかけや招聘も視野にいれる必要があることを了解した。今後、さらに研究委員会を中心として、特別プロジェクトを編成していく必要性を確認した。

4. 第6回大会開催地について

- 立命館大学で開催することが内定した。

5. その他

- 平野理事から学会誌第4号の編集進捗状況の説明を受けた後、『スポーツ社会学研究』の市販

について提案があった。市販の動機は財政的なものではないが、各大学図書館への搬入、幅広い購読者層の開拓を含めて、波及効果があればよいと考えているとの説明を受けた。理事会としては、市販の方向に賛成し、出版社の選定方法を含めて編集委員会に一任することとした。

(文責: 菊 幸一)

2. 編集委員会の業務報告

1. 一般投稿原稿について

今年度は、論文としての掲載を希望される一般会員の投稿が昨年度に比較して微増となりました。前年度までの編集委員会の尽力にたいし、会員各位の認識が高まった成果と受け止めます。今後とも、研究誌『スポーツ社会学研究』の前進と質的向上のためにあらゆる面で協力下さるよう、広くお願いします。

2. 依頼原稿について

従来の例にならい、昨年度大会におけるゲスト・スピーカー報告の原稿化を影山 健会員に、また研究委員会から第6回大会の準備のためヨーロッパに赴かれた菊 幸一、山下高行両会員に、事情が許せばという前提で海外学界情報の原稿化を、お願いしました。後者は日程の関係で実現しないこともあります、その場合でもこの興味深い情報の一部は『会報』本号でお読みいただけると期待します。

松村和則会員と伊藤公雄会員に書評原稿を依頼しました。

3. 専門委員名の一括公開について

今年度は、一般投稿原稿のレフェリーとして査読にあたる専門委員を17名委嘱しました。去る9月7日の第1回編集委員会において、査読の公正を期すため専門委員名を研究誌奥付で一括公表することを決定しました。これにより奥付がタイトになるので、日本文ページと英文ページの二本立とします。

4. 研究誌の市販について

『スポーツ社会学研究』の第3号までの定着を基盤とし、学術誌としての公開性と社会的ステータスのさらなる向上、ならびに大学図書館・公共図書館等の購入の円滑化、という目的のため同研究誌を市販する件につき、10月6日の第2回理事会に付議しました。理事会では、これを是とし結論は編集委員会の討議に委ねるという決定がなされました。10月15日の第2回編集委員会においては、これを推進する具体的方策を取ることを決定しました。翌16日、宮内孝知編集委員と平野の両名が、法政大学出版局にたいしこの件の検討を申し入れました。本件は現在折衝中ですが、編集委員会としては第4号からの実現を追求するよう努力します。

当然ながら、市販によって本誌の学術研究誌としての性格はなんら変化しません。編集委員会の主体性も業務も従来通りです。所期の目的通り本誌充実の一環となることを期待します。なお財政への寄与はこの件の目的ではありませんが、結果としてそうなればこれを受け止める、ということです。

5. 研究委員会との意見交換について

研究委員会が、第6回大会に予定される国際シンポジウムに向けて渾身の努力を傾注しているこ

とは、本号の研究委員会からの報告で判明することと思います。については、編集委員会としてもこの努力に協力を惜しまないため、10月15日の編集委員会において討議し、もし研究委員会が必要と判断した場合には、来年度の第5号においてその目的に添った特集を組む用意があることを研究委員会に伝えました。最終的には研究委員会との今後の意見交換をもとに、編集委員会として今年度内に決めます。

なお、特集のために一般投稿原稿の掲載スペースが圧縮されることが起きないよう極力努力しますので、心おきなく従来にまして投稿して下さい。

6. 原稿のフロッピー入稿について

上記10月15日の編集委員会において、研究誌原稿のフロッピー入稿促進を決定しました。編集作業の迅速化と経費節減のためです。本年度はこれを予告していませんので協力要請としましたが、来年度以降はフロッピー入稿を原則とします。詳細要領は追ってご通知します。

(編集委員会代表 平野秀秋)

3. 研究委員会報告

97' 国際シンポジウムにむけて ヨーロッパ・スポーツ社会学者との交流

学会研究部では、1997年春に国際シンポジウムを開催することを計画している。特にヨーロッパ圏を中心とした各国の指導的研究者をそこに集結させる予定である。この国際シンポジウムの目的は大きく言って3つある。一つは日本のスポーツ社会学研究の国際化を進めることであり、第二にヨーロッパ圏とアジア圏の研究ネットワークを形成する契機とすることである。第三には、このシンポジウムを通じ、国際的水準で新しい研究方向を模索していくことである。だが何よりその眼目は、日本のスポーツ社会学者と諸外国の研究者の人的、また研究交流を促進することにある。そのため、シンポジウム終了後、各國の研究者を全国各地の大学で、少々無理矢理でも数日引き受けただくことを構想している。私の乏しい経験でも、まずは一晩飲んで、つたない語学力を駆使して語り合うことから研究交流は出発していくのではないかと思う。

さてこのため、この夏休みを利用し、菊理事と私とで各國の研究者と予備折衝を行ってきた。どのような研究者を招聘するかは未だ確定した段階ではなく、今後大会が近づくにつれ招聘する個々の研究者のプロフィールを紹介していくこととしたいが、ここではこの夏の予備折衝の状況を簡単に紹介することとしたい。訪問したのは仏・英二カ国であったが、レスター大学でドイツのリガウア教授と会うことができ、仏・英・独のスポーツ社会学研究者と議論することができた。

フランスではパリ第11大学訪問。ここにはフランス・スポーツ社会学会会長、ポシェロ教授とドゥフランス助教授に会うことができた。両氏ともブルデューの門下生であり、『ディスタンクション』のもとになった調査を行った研究者である。特にドゥフランス助教授は高等社会科学院でブルデューの指導のもと博士論文を執筆した俊英であり、フランス・スポーツ社会学会で理論面の中心人物の一人、ブルデューの本にもしばし名前が出てくる研究者である。両氏とも日本スポーツ社会学会との交流を大歓迎しており、今回接觸したなかで最も熱望している様子がみられた。フランス・スポーツ社会学会は現在会員約50名。半数はブルデューの理論フレームのもとで研究を行っている。両氏の所属するパリ第11大学スポーツ文化研究所でも、スポーツの好みと階級、スポーツという特殊「場」の研究など、ブルデュー理論の実証的研究がテーマ化され取り組まれている。

ポシェロ氏は写真で見るようだ変陽気なスポーツマンであり、現在はハンググライダーのプレ

イヤー。その関係で鹿児島で行われた大会に参加したことがあるという鳥人である。フランス人らしく食通、またワインにも造詣が深く、とっておきのワインを贈呈された。他方ドゥフランス氏は、通訳の高等社会科学院の山田さんによれば、典型的なフランスのインテリのこと。ポシェロ氏は英語はダメであるが、ドゥフランス氏は堪能。つたない英語で会話すると、先年日本に来られたジョン・ホーン氏とも友人であり、話し込むと心を開いてくる好人物。むしろ日本流に言えば「はにかみや」と言うべきか。フランスの大学教員のポジションについて聞いたところ、給料の額まで教えてくれたのにはびっくりした。彼曰く一文化資本と経済資本はやはり異なり、容易に転化しないとのこと。このたぐいの冗談で心を開いてくる御仁である。研究面では現在エリヤスを読んでいるとのこと。ブルデューの射程が個々の特殊「場」の論理の解明により焦点が置かれ、よりマクロな構造との接合が完成していないせいか。その面をエリヤスによって補強しようとするのであろうか。さればブリティッシュ・カルチュラルスタディーズやネオ・グラムシ主義との関係は如何。こんな会話を交わしたが、応えるに曰く。カルチュラル・スタディーズの仮説が皆無の状況で、影響力を持ち得ないこと。想像以上知識人でさえ英語が少々苦手のようである。この面で変な共感を覚えた。

イギリスではレスター大学のダニング教授、ブライトン大学のトマリンソン教授を訪問。ダニング教授はエリヤス学派の大番頭であり、日本でも『ラグビーとイギリス人』(ベースボールマガジン社)という表題で著書が邦訳されている。菊理事の以前の留学先であり、また現在島根大学の中山氏が留学中。大変陽気で、イギリス流のヒューモアを連発する御仁。またビターとパイプを愛し、私たち日本人研究者グループとパブとインド料理屋で陽気に語り合うという展開となった。シンポジウムの議論はどこへその。示した板の要項を一読。Good, Good! の連発の後にOKありがとう行かしてもらう、であっけなく交渉は終わり。後はKouichi元気だったかという会話と冗談に明け暮れることとなった。気むずかしい研究者との情報もあったのでいささか緊張していたが、大変気さくな人物であった。

ここでは偶然サバティカル期間中のドイツのリガウア教授と会い、様々な意見交換を行うことができた。60年代から70年代一つの影響力を保持したこのフランクフルトシューレの老理論家が(彼はT・W・アドルノの弟子であり現在60歳をこえている)今日どのような意見を有するかに興味を持っていたが、薄暗いインド料理屋の店内で、議論の最後の最後に、俺が30年前に提起した問題は未だ継続していると強く述べたのにはある種の感動を覚えた。それはさておき、リガウア教授からはドイツのスポーツ社会学の現状について事情聴取することができた。ドイツでは現在スポーツ社会学プロバーの研究者は10~20人程度。関連する社会学者を含めれば50人程度の規模になるとのこと。ハバーマスとルーマンが研究に強い影響を与えていたことであった。上昇気流のフランスに対し、ドイツはいささか衰退気味の感あり。それだけに日本との交流を強く望んでいた。

トマリンソン教授は現在40代半ば。ハーグリーブスと共に1992年の北米スポーツ社会学会ジャー



右よりポシェロ教授、ドゥフランス博士



右よりリガウア教授、ダニング教授



トムリンソン教授

ナルでの特集 "British Cultural Studies and Sport" を取りまとめ、現在のイギリス・スポーツ社会学研究の一方のリーダー的位置にある。実は当初送った英文のレターが不完全で、「残念ながらこの夏多忙で日本に打ち合わせに行けない」との返信をもらい、すつたもんだのあげくエジンバラのジョン・ホーン氏を通してようやく事情説明の上での会見であった。そんなわけで会談は、「だっておまえの手紙は日本でやると読めるんだもん」で始まった。大変気さくな人でいろいろな情報を提供してくれたが、なかでも興味深かったのは、イギリス社会学会では現在スポーツ社会学グループの結成を準備しているとのこと。1997年、ヨーク大学で行われるイギリス社会学会大会時に"Power & Resistance" のテーマで研究集会を開催予定。なるほどカルチュラル・スタディズらしいテーマ設定であるが、約50人参加予定とのことである。当面スポーツ社会学会を単独学会として設立の予定はないが、設立の暁には2~300人規模の参加者があるだろうとのことであった。もちろん参加を快諾。Eメールを利用した研究交流も提案された。

各国とも日本との交流を大いに歓迎している様子がうかがえた。その関心は一昔前のエスニカルなものからではなく、グローバリゼーションという共通の土俵の上でのものであることを付け加えておかなければならぬだろう。いずれにせよ本格的な研究交流が開始される土壤が整いつつあるとの感を持った。その意味で1997年国際シンポジウムは、日本のスポーツ社会学の発展にとって重要な契機となるであろう。多数の参加と協力をお願いしたいと切に願う次第である。

(研究委員会委員 山下高行)

4. 事務局報告

1. 『会員名簿』の作成について

この件につきましては先の会報でもご案内申し上げましたが、住所等変更の報告は現在までほとんどない状況です。住所が不明の会員の方々もいらっしゃるようで、同封いたしました貴会員の住所等を今一度ご確認のうえ、訂正事項がありましたら朱書きにて訂正を施し、事務局宛て返送ください (Faxでも、E-mailでもかまいません)。新名簿へは報告のあった住所が記載され、郵便物は記載住所へ配達されます。また、会員相互のコミュニケーションをよりスムーズにするために、E-mailのアドレスを追加掲載したいと思います。E-mailをお使いの方はご報告ください (民間ネットをご利用の方は、ID番号と社名をお知らせください)。締め切りは来年1月末日とします。ご報告のない方は、お送りしましたものがそのまま掲載されますのでご注意ください。

2. 第10回国際比較体育スポーツ学会の開催について

表記学会が、1996年8月26日～9月1日の間、東京都八王子市の大学セミナーハウスにて開催されます。詳細についてお知りになりたい方は、下記までご連絡ください。

連絡先：〒305 つくば市天王台1-1-1 筑波大学体育科学系 市村操一

Phone 0298-53-2685

Fax 045-911-5164

日本スポーツ社会学会第5回大会案内

1. 日本スポーツ社会学会第5回大会開催要項

- 1) 日 時 1996年3月28日(木)、29日(金)
- 2) 会 場 宮城教育大学 講堂および7号館各教室(仙台市青葉区荒巻字青葉)
- 3) 日 程

	11:00 受付 理事会	12:00 個人発表	14:00 特別企画公開 フォーラム	16:30 総会	17:30～ 懇親会
28日 (木)					
29日 (金)	個人発表	昼食	学会研究委員会企画 シンポジウム		
	9:30	12:00 13:00		16:00	

- 4) 大会参加と(抄録を添えての)研究発表の申し込み…平成8年1月16日(火)までに同封しました申込用紙によって、
〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉 宮城教育大学内
「日本スポーツ社会学会第5回大会実行委員会」宛、郵送で申し込んで下さい。
Phone & Fax 022-214-3456

5) 研究発表

- ①個人の研究発表は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。
- ②研究(個人)発表の持ち時間は、各題につき質疑応答を含めて30分以内としますが、発表者数によって適宜時間を調整し、また発表会場を変更することもあります。
- ③「抄録集」として印刷製本するために、抄録はワープロ等で作成し、1題につきA4版用紙2枚、40字×40行(演題と発表者名を含む)の横書きにして下さい。
- ④発表のために必要ならば、スライド映写機、OHP、VTR、その他の機器が使用できますので申込用紙に記入して下さい。また、当日会場で配布する発表資料は各自で作成し、50部以上を持参して下さい。
- ⑤プログラム
個人発表の申し込みを受けて作成し、2月初旬に全会員に発送します。大会参加者には同時に抄録集も届けられるようにしたいと考えています。

6) シンポジウム等について

詳細は次頁の「2. 特別企画およびシンポジウムについて」をご覧下さい。

- 7) 参加費(抄録代を含む)…4,000円(学生は2,000円)

懇親会費は別途3,000円 いずれも当日受付にて申し受けます。

8) その他

- ①宿舎の斡旋はしませんが、情報は提供します。
- ②両日とも大学会館内の食堂が利用できます。
- ③会場はJR仙台駅から市営バスで20分程度の位置にありますが、利用できる交通機関等はプログラムに添えて案内します。

2. 特別企画およびシンポジウムについて

《実行委員会特別企画公開フォーラム》

- 1) 日 時 平成 8年 3月28日 (木) 14:00~16:30
- 2) 会 場 宮城教育大学講堂
- 3) テ ー マ Jの風：地域スポーツを変えられるか
- 4) 演者と演題
①遠藤憲子（東北通商産業局総務企画部）
　　プロ・チーム（ブランメル仙台）の設立にいたる論議から
②小幡忠義（塩釜FC代表）
　　クラブ・スポーツ（塩釜FC）の実践から
③石川 晋（文部省体育局主任体育官）
　　スポーツ政策の立場から
④高橋義雄（東京大学大学院）
　　研究者の立場から
- 5) コーディネーター 中島信博（東北大）
- 6) 提案趣旨

近年の日本のスポーツ界での事件といえば、まずJリーグ（プロ・サッカーリーグ）の設立が注目される。このJリーグの風は、仙台圏においてもかなり大きな波紋を巻き起こした。フォーラムでは、具体的な動きについての報告を差し当たり手がかりとしながら、産官学を含めた様々な立場から論議を深めたいと考える。これによって、「地域スポーツ」をいま一度再考する機会としてみたい。

3. 学会研究委員会企画シンポジウム概要（案）

- 1) 日 時 平成 8年 3月29日 (金) 13:00~16:00
- 2) 会 場 宮城教育大学講堂
- 3) テ ー マ スポーツ社会学の理論的可能性を探る
　　ーその1・身体/BODYをめぐってー
- 4) 演者と演題
①山下高行（立命館大学）
　　カルチュラル・スタディズと身体/BODY
②菊 幸一（奈良女子大学）
　　エリアス派スポーツ社会学と身体/BODY
③吉見俊哉（東京大学）
　　わが国のスポーツと身体/BODY
- 5) 司 会 伊藤公雄（大阪大学）、上杉正幸（香川大学）
- 6) 趣 旨

①、②はイギリスにおけるスポーツ社会学の身体/BODYをめぐる論争的視点を各々の立場から紹介し、わが国のスポーツ状況への理論的応用可能性を探る。③は社会学プロパーの立場からわが国の身体/BODYをめぐる理論的到達点を明らかにしながら、スポーツ社会学への理論的課題や提言を行う。

また、シンポジウムに先立ちJ.Mandle氏(米国)による、発展途上国に対するスポーツ社会学の理論的可能性および批判的検討について特別講演が予定されている。

特別寄稿

インターネットとスポーツ、スポーツ社会学、スポーツ社会学者

平井 肇（滋賀大学）

hirai@sue.shiga-u.ac.jp

1. インターネットの登場

「電子メール（E-mail）」、「ホームページ」、「WWW」、「ネットワーク」、「プロバイダ」等々、新聞や雑誌にはインターネット関係の情報が氾濫しています。皆さんの中にも、出張から帰ってみると電子メールが何十通もたまっていて、読んで返事を書くのに一日かかった経験のある人や、ご自分でホームページを開いて、そこにこれまでの論文の要約や家族の写真（？）を入れている人、共通の趣味や学問的な関心を持つ人たちと、ニュースグループを通して意見の交換をしている人がおられるのではないかでしょうか。

いわゆるインターネットと総称される情報の伝達ツールないし情報の伝達システムは、近年急速に発達しました。人類は、これまでにもいろいろな情報の伝達ツールを発明し、利用してきました。古くはのろしや飛脚、それから郵便、新聞、雑誌、電話、電報、ラジオ、テレビと続き、最近ではファックスは私たちの生活にとって必需品になりつつあります。そんなときに、今度はこのインターネットの登場です。

インターネットの発達進歩は急速です。インターネットを通して流れる情報量も、利用者も猛烈な勢いで増加しているのはもちろんですが、利用の仕方も昨日までは考えられなかつたようなことが一夜にして可能になります。インターネットの初期は、電子メールを中心としたテキスト（文字）情報が中心でした。それがこの1・2年で画像・映像・音声による情報が飛躍的にのびてきました。インターネットが郵便からファックス、さらにはラジオや電話の機能も持つようになってきました。

2. スポーツが変わる

先日、アメリカのカレッジ・フットボールのラジオ実況中継を生で聞きました。試合後にはハイライトの写真を見ながら、ヒーロー・インタビューを聞きました。スタジアムにいるとは言えないまでも、ラジオが届く範囲に住んでいて、テレビでスポーツニュースを見て、翌朝の新聞を読んでいる心境でした。これが、日本において、ほとんどリアルタイムで体験できるのです。もちろん、インターネットの仕業です。コンピューターがインターネットに接続していて、必要なソフト（ほとんどが無料で入手できる）があれば、これが可能なのです。

今のところは音声（ラジオ中継）ですが、近い将来インターネットでテレビのような映像をリアルタイムで見ることが可能になるでしょう。いや、それ以上のことができるはずです。インターネットでは、双方向の情報伝達が可能ですので、こちらから情報発信をして、「何らかの形で」視聴者が参加できるかも知れません。こんなスポーツの楽しみ方が一般的になる日も近いでしょう。

3. スポーツ社会学が変わる

インターネットが普及していくと（衛星放送やペイTVに代表されるその他のメディア・ツールも急速に普及しています）、スポーツ情報は今まで以上にボーダレス（無国籍・超国籍）化し、リ

アルタイムであることが当たり前になってきます。そうなると、私たちも、これに即したものを探査テーマに取り上げるようにならなければなりません。

90年代に入って、スポーツの地球化（グローバライゼイション）は、世界中のスポーツ社会学者にとってホットなテーマになりました。この背景には、情報テクノロジーの発達と商業資本の世界規模での展開に伴っての、スペクティター・スポーツへのニーズの変化が大きく関係しています。しかし、なぜか日本ではこのテーマへの関心が高まりませんでした。Nomo現象などもあって、遅ればせながら研究が進むとは思いますが。

そういうしている間に、世界のスポーツ社会学では、インターネットとスポーツの関係が次の大きなテーマになることは確実です。インターネットによって、世界中の大多数の人が、時間や空間をほとんど意識しないで、世界中のスポーツを楽しむことができるわけです。その結果、従来の人々のスポーツとの付き合い方や考え方にも変化が起きてくるでしょう。スポーツ組織の形態や運営方法にも変化が見られ、プロスポーツではグローバル・リーグも現実のものになるかも知れません。また、「するスポーツ」、「みる・みせるスポーツ」から、ヴァーチャル・リアリティ（仮想空間）の中でスポーツをして遊ぶといった新しい形態のスポーツの楽しみ方が根付いてくるでしょう。

その結果、今まで考えられなかった現象や問題が発生してくるはずです。

4. スポーツ社会学者が変わる

スポーツ社会学の研究者に限らず、教育・研究活動に携わる者すべてにとって、インターネットはライフスタイルや生活・研究のパターンを変えつつあります。

まず、電子メールの利用があげられます。インターネットの特徴ですが、距離も時間も意識する必要がありません。電話やファックスと違って、大学等の教育機関に所属していれば（今の所）無料ないしはタダ同然です。複数の人に、同時に送ることも可能です。電子メールは、基本的には文字情報を送るツールですが、文字以外の画像や映像、音声なども送るツールもあります（ただし、今の所いろいろな制限があります）。論文などの送付も、電子メールを使う場合が多くなりました。また、個人間の連絡のみならず、学会や研究会の連絡やニュースにも、電子メールを使っているところが多くなってきました。電子メールの利点は、時間や金銭面での節約に限りません。たとえば、ニュースレターとして何かを流すと、直ちにフィードバックが、しかも複数の人から期待できます。これが何回か繰り返されると、かなり「練れた」ものになって行きます。電子メールは共同作業を行う際に、情報を知識へ、さらには創造へと高めて行く上で強力なツールとなるはずです。

インターネットを通して情報を受けとることに関して、私たち研究・教育者が受ける恩恵のひとつは、電子図書館ではないでしょうか。電子図書館にはいろいろなサービスがありますが、一番ありがたいのは自分のコンピューターで、世界中の図書館にアクセスして文献検索ができることです（その図書館が、そのようなサービスを提供していることが前提ですが）。最近は、スポーツ関係のデータベースも充実してきました。学術情報センターの利用資格を持つと、和洋書の書籍情報のみならず、Social Science AbstractやERIC等のスポーツ社会学関係の論文雑誌をカバーしているデータベースにアクセスすることができます（図1）。

最近はこのような利用形態に加えて、自らが情報を発信する個人や組織が増えています。WWW上に自分（たち）のホームページを立ち上げるのです。不特定多数の人にそこにアクセスしてもらい、情報を提供しようと言うものです。日本でも、かなりの大学がホームページを開設しています。

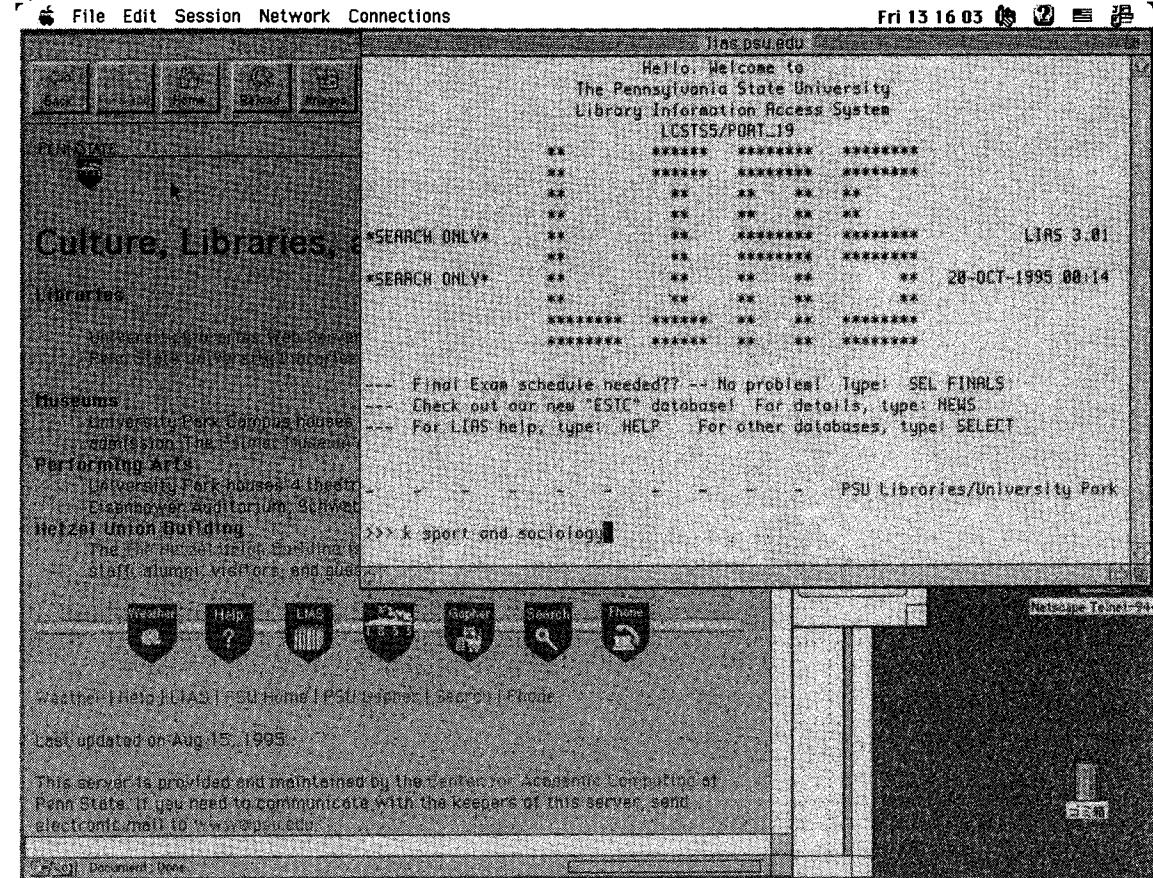


図1：ペンシルバニア州立大学のホームページと図書館検索システム

残念ながら、国内の体育やスポーツ関係の組織やグループが自分たちのホームページを持っているケースはまだあまりないようです。しかし、このような動きは今後急速に高まるでしょう。外国の場合、大学の機関や競技団体、たとえばオリンピックや世界選手権の組織委員会等はもちろんのこと、大学のサークルや地域クラブなどがホームページを開設しています。資金や既存のネットワークに縁遠いグループでも、アイデアと自分たちのネットワーク、それにボランティア精神を十分に發揮すれば、すばらしいクラブ・ハウス（ホームページ）を持つことができるのです（図2）。

5. 新しい関係

いわゆるニューメディアが登場する度に、それらが人間疎外を助長するという指摘がなされます。でもいつのまにか、そんな話は消滅してしまうか、無視されます。電話の時もテレビの時も、そうでした。そしてこのインターネットのケースでも、この議論は同じ運命をたどるでしょう。インターネットのいろいろな機能を使いこなすようになれば、インターネットは人に優しく、便利で、有効なツールであることに気づかれると同時に、これまでにはなかった新しいタイプの人間関係が生まれることに気付かれるでしょう。

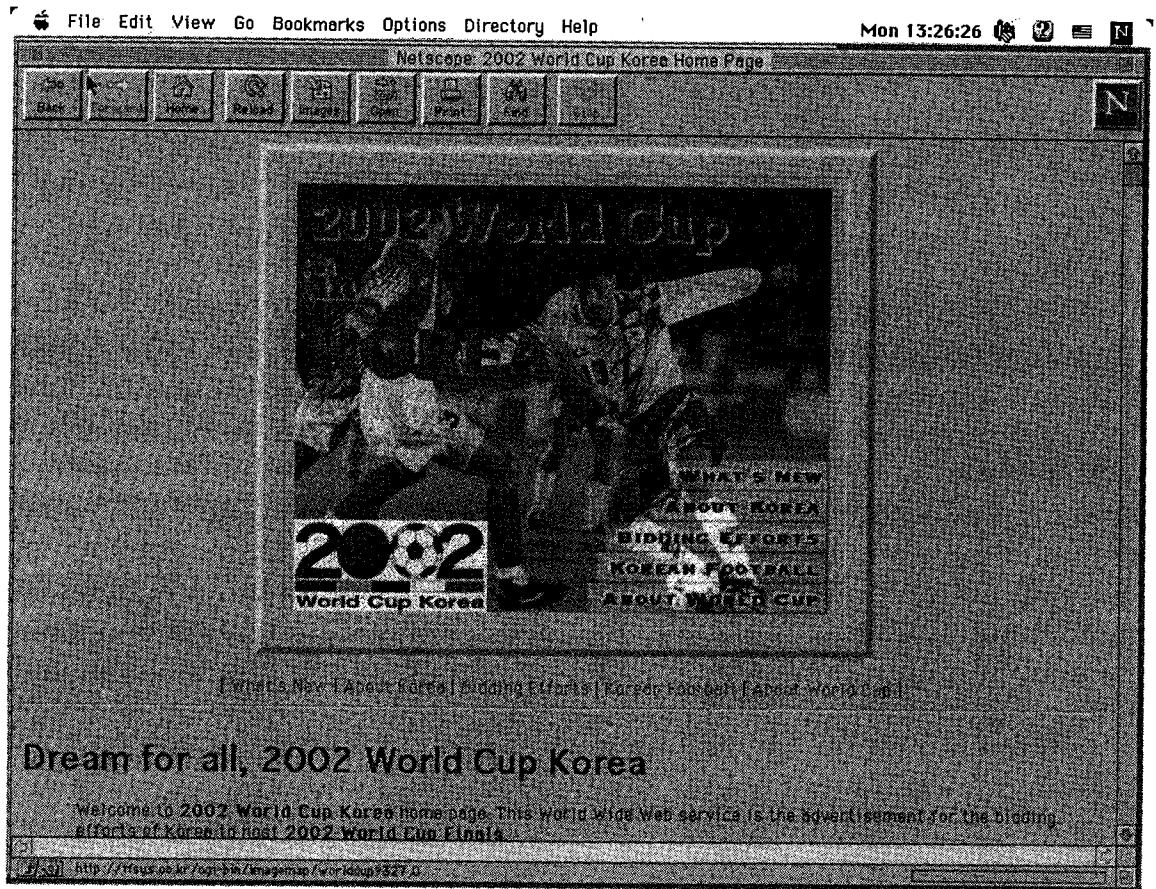


図2：2002年World Cup Koreaのホームページ

インターネットによって、いわゆるマルチメディア化が進み、既存の情報伝達のためのツールが統合化されるでしょう。しかし、単なる統合でなく、そこにプラスアルファーがあります。そのプラスアルファーが、スポーツの世界を、スポーツ社会学を、スポーツ社会学者を変えてしまうダイナミックなパワーを秘めているのです。

+++++

平井会員からの文章、写真は、すべてE-mailで送られてきました。お送りいただいた文書は、ワープロの画面に取り込み、写真（お送りいただいたものはカラーです！）は、指示された場所にサイズを変更して貼り付けました。これで、文章入力の作業が省けるため、格段に編集の能率がアップします。もちろん、写真の取り込みなど、これまでにはスキャナー等の機器を使わなければ不可能であった高度な編集作業も、いとも簡単にできてしまいます。この他事務局では、E-mailは海外からの入会申し込みの受け付けや、理事の先生方との意見の交換等に大活躍です。通信環境の整っている大学でしたら、コンピュータに専用のボードを取り付け、ラインを1本引くだけで使用が可能です。E-mailにトライしてみませんか？

（事務局 山本記）

研究通信

社交ダンスと生涯スポーツ

永井良和（関西大学）

先の大会で、「社交ダンス（ボールルーム・ダンス）の変容とスポーツ化」と題する報告を行なった。「スポーツ」と「社交ダンス」という言葉の組み合わせはいさかとまどいをおぼえせるものかもしれない。社交ダンスは文字どおり人間社交のための手段であり、風俗習慣の範疇にはあってもスポーツとはみなされにくいからである。

ところが現在、ダンス愛好者の雑誌をぎわせている話題がある。それは、近い将来のオリンピックで競技ダンスが正式種目として加えられる可能性がある、というものだ。アマチュア競技ダンスの国際団体IDSF(International Dance-Sport Federation)は、2000年のシドニー・オリンピックでの参加実現に向け運動を展開しているとも聞く。オーストラリアのスポーツといえばフットボールがまず思い浮かぶが、それもイギリスとのつながりの強さからきているものだ。この夏、10日あまりをクイーンズランド州で過ごしてみたところ、競技ダンスが盛んなことに驚かされた。人口1万くらいの町にでも、競技会が開催されている。オーストラリア映画には、熱血ダンスもの、とでも呼べそうなジャンルさえあるくらいのお国がらなのだ。

日本のダンス界は、敗戦いらい競技ダンスを志向してきた。それは、戦前・戦後をつうじて風俗営業法の取締対象に組み入れられ、生活習慣として根づくことのなかった社交ダンスを、あらたな枠組みのなかで提示して社会的な地位の向上をはかるという意図に導かれている。このときに使われたフレーズが、「ダンスはスポーツである」というものだった。

競技ダンスは高度な技術を必要とする。日々の鍛錬と、カップルの協調と、研ぎすまされた音楽性に裏づけられてこそ、スポーツとしてまた身体芸術として称賛に値する演技が生まれる。一およそこのような認識であったとみてよい。冬季オリンピックなどのアイス・ダンスの競技にちかいものをイメージしていただければよいだろう。

「スポーツ化」によって、踊り方や審査の仕方の標準化が達成された。「競技」として成り立たせることで、「低俗に走る」ことも防ぐことが可能になった。だが、社交ダンスの「スポーツ化」は別の問題を頭在化させる。競技として専門化し技術が高度化することによって、初心者が親しみ、ながく楽しむものとしてダンスは適当でなくなってしまったのである。プロ、アマいずれにおいても、技量が尊重されるあまり「楽しみとしてのダンス」という考え方方が受け入れられにくくなっている。誰もが踊れる「やさしいダンス」は低級なものとみなされるようになった。現状をみると、プロの教師はアマチュアのサークルをあなどり、サークル活動家は劣等感を抱いている。

ダンス界のこの傾向は、「スポーツ」の概念が拡大され、生涯スポーツのような考え方をつつみこむようになってきた一般的な経緯と逆方向にすすむものだ。取りざたされているオリンピック参加が、あるいは競技指向をより強めることになるかもしれない。

けれども、わが国のダンスをささえるのは、競技人口を圧倒する「楽しみのためのダンス」の爱好者たちといえる。とりわけ高齢者にあっては、ダンスを踊ることはさまざまな長所をもっている。家庭のなかで疎ましがられる存在が新しい出会いのチャンスを与えられ、異性との身体的なコミュニケーションによって精神的な若さをとりもどす。なにより自然な歩行の延長であるダンスは、健康維持という点でも無理のないトレーニングになる。だからこそ、競技指向のスポーツ・ダンスではない、もうひとつのダンスの存在意義を高らかに宣言する必要がある。そのためにはダン

ス界の意識改革をはからねばならない。—これは、私のオリジナルな意見ではない。この傾聴すべきアイデアを、私は、川北長利さんという方からうかがった。川北さんは1905（明治38）年の生まれで現在90歳。藤沢・鎌倉を中心とした湘南地区の高齢者ダンス・サークルで活動をつづけている。

なにかのお役に立てばと思い、川北さんが昭和のはじめから書きついでこられた評論を復刻し、あわせて現在の高齢者ダンスの活動についての評論などを編集して一冊の論集にとりまとめた。『川北長利社交ダンス評論集 1932-1995』がそれである。大学の研究費のうち印刷費にまわせるものがあったので、200部を制作して公共図書館に寄贈し、関係者に配布した。そして、さいわいにも毎日新聞の生活面に紹介記事が掲載された（関西地区95年6月14日「お年寄りの胸踊らす／その道70年のダンス論出版」東京ほか7月12日「幾つになっても楽しい／89歳社交ダンス論集」）。

私にとっての驚きは、この記事の掲載後の反響である。全国から200通以上の問い合わせをいただいた。マス・メディアの力はもちろんあろうが、関心の高いダンス愛好者がこれほどまでにいようとは想像していなかった。なるほど、わが国のダンスをささえているのが競技人口をしのぐ「楽しみのためのダンス」の愛好者たちだとは聞き知っていたけれども、寄せられたたくさんのハガキによつてはじめてアリティを感じたといつてよい。

すでに残部がなくなっていたので、改めて頒布用に1000部を刷り増しした。それも、サークルの指導者をつうじて読者を獲得しつつある。編者としても、できるだけ多くの人に読んでもらいたい。フィールドワークの成果をこういうかたちで「還元」できるとは考えてもいなかつたので、とまどいつつも安堵している。

と、同時に、競技指向を内在させたダンス界が、今後どのような姿勢をとるのか。また、組織化されていないサークル・ダンスの活動がどういったビジョンを提示していくのか、これからも見守っていきたいと考えている。

* * *

競技スポーツと生涯スポーツ、高齢者のスポーツといったテーマに関心をお持ちの方などに読んでいただきたいと思います。国立国会図書館、東京都立中央図書館・日比谷図書館、秩父宮記念スポーツ図書館、神奈川県立図書館、鎌倉市中央図書館、藤沢市総合市民図書館、早稲田大学演劇博物館図書室、松竹大谷図書館、民音音楽資料館、国立音楽大学付属図書館、日本近代音楽館、日本体育大学図書館、筑波大学付属図書館、東京都社会福祉総合センター福祉情報資料室など、東京・湘南地区的図書館にはすでに寄贈ずみですので閲覧による利用も可能です。

なお遠隔地の場合、有料でよろしければ下記までお申し込みください。

〒251 神奈川県藤沢市西富1-3-16

湘南グッド「川北長利評論集」係

※制作費（実費）および郵送料として1500円をご送金下さい。

子ども追っかけおやじのひとりごと

矢崎 弥（米沢女子短期大学）

私は、ここ1年間小学生の子どもの調査を行っている。何故かといえば、それをすれば自己の研究費とは別枠で研究費がもらえるからである。恥ずかしい話であるが、理由は単純である。もっともらしい理由は後から付けることになる。（これまで情熱を持って子ども研究を行ってきた方々、「ごめんなさい！」）

まず、子どもたちの生活全体を把握したいというこれまた単純な欲求から生活時間調査を行つてみました。調査票は、子供たちが1日を誰と、どこで、どの様な活動に費やしているのかを明らかにすべく（財）労働科学研究所の生活時間調査票を参考に作成し、データ入力や集計には表計算ソフトエクセルバージョン4のマクロを使い、活動項目ごとの15分単位での行為率や活動場所、活動仲間の時間量等を集計しました。これといって目新しい結果が出たわけではないのですが、その中の1つとして、小学校高学年の自由時間の活動パターンが、二つに分かれているとしました。一つは、「在宅個人型」とでも言うのでしょうか、ファミコン・マンガ・テレビといった活動内容を自宅で一人ですることが中心の子どもで、もう一つは、「野外集団型」で、スポーツや運動などを外で複数の友人とすることが中心の子どもです。野外集団型の子は大部分が、スポーツ少年団などに入っています。運動・スポーツ活動という点から見れば、運動する子はたくさんし、しない子は全くといってよいほどしていないわけです。

こんな結果に、よくあるペシミスティックな子ども論を当てはめると、一方は、「孤立化する子」が当てはまり、一方が「スポーツで囮い込まれた子」となってしまいます。当たり前のことでありますが、子供たちがどの様に活動しているかのアリティが欠如しているこの様な調査ではそんな解釈をすることはきわめて危険です。また、そのような解釈自体にも、本田和子が言う「子どもたちを将来の大人の予備群として理解する事の危険性」もあるわけで、子供たちの活動理解には彼らの地平に立つことが必要というこれまた当然の結論に帰着するわけです。（勿論、教育という観点からすれば違うでしょうが）

子どもたちの参与観察などしたことの無かった私ですが、猿の生態を観察するよりはそれほど予備知識が無くとも大丈夫であろうと安易に考え、子どもたちの遊びの中に入つてみました。大変だったというのが正直な感想です。親でもない大人が子供たちにくつづいて遊ぶ姿を想像してみてください。これって結構恥ずかしいですよ。また、「おじちゃん、あそんでよ」なんてことになり、ねずみ取りがネズミになつてしまふこともたびたび。

生活時間調査で、どんな遊び・運動・スポーツをしたか記入してもらつてたので大体の予測はできていたのですが、本当に今の小学生は伝統的な運動要素の強い遊びをしないのです。鬼ごっこや竹馬や一輪車などしていましたが、殆どがスポーツです。秘密の基地つくりや陣地取り的な遊びや馬乗り等は全くといつてしまふ。自然探検的な遊びも話を聞いてみるとしていなようです。こんなに自然があるのに。だいたいこんなきれいな川があるのに泳ぐことが学校で禁止されているのです。ともかくも子どもたちは6人以上集まるとスポーツをしています。低学年でもそうです。こんなことを書くと、子どもの遊びは貧困だなあと感じる人が多いと思います。確かに、種類は少ないです。私もそう感じました。（でも、この様な状態にしたのは大人なのですよね）しかし、遊ぶ種類は少なくとも、スポーツをしていても、子供たちの遊び方には多くの創造力が發揮されているのです。例えば、小学校低学年の子がスポーツするとき、正規のルールに近い形でするときもありますが、スーパースター・マンガの主人公のまねをしながらするときもあります。サッカーなど

では、まず、自分の好きな選手になります。「俺はカズ」「じゃ、俺は井原」てな具合に。そしてその役は何回か交代します。私にはジーコ（私が鹿島アントラーズのファンだからでしょうか、それともおっちゃんだからでしょうか？）になれといいます。カズの役は絶対まわしてくれません。また、出来もしないのにすぐオーバーヘッドキックをやりたがります。ゴールキーパーも楽にとれる球を転びながらかっこよく捕る。ルールだって、ゲームが一方的になると負けている方に即席のハンディをつけたりします。疲れてくると、誰ともなくゲームから抜けていきます。そこでゲームは終わりです。元気な子は一人でもボールを蹴っています。疲れがとれると休んでいた子の一人の始めるぞのかけ声で途端にゲームが再開されます。こんなこともありました。疲れた誰かが「俺、滑り台やる」というと次々に「俺も」といって、滑り台での遊びが始まりゲームが終了するのです。

小学校高学年になると、さすがにゲーム前に、進行の取り決めをするようになりますし、勝敗にこだわる部分は多くなります。しかし、低学年のごっこ遊び的要素はふんだんに見られましたし、ゲームを楽しくするためのある程度のルールの改編については柔軟です。スポーツ少年団の練習も何回か見学しました。本に出てくるようなとつもなく管理体制の厳しいクラブにお目にかかるなかつたのですが、練習内容はともかく、子供たちは遊んじやっている。結構きついこと言われ、怒られても、仲間とわいわい楽しく、遊び的な雰囲気で練習をこなしている。（勿論、だからこわいのだと言う人がいるかもしれません）確かに、練習がない日でも彼らはサッカーをやってしまいます。でも、正式な競技的な形式でやるのではなく、ごっこ遊び的要素を含み、それなりにルールを決めあってやっています。

ホイジンガは確か「遊びはまじめよりも高い次元にある。まじめは遊びを排除するが、遊びはまじめを含んでいるもの。故に、遊びが精神の最高領域に相応しいものである。」と述べていたように記憶しています。子どもたちの遊び方はまさにそれを裏付けています。子どもたちは何かで遊んでいるとすぐ熱中しまじになります。そして飽きたり疲れたりすると冷めてくる。しかしすぐマジになれるものやマジになれるやり方を探し創造していくのです。その切り替えは大人=近代的理性からすると分裂症的ですが、すばらしい創造力を發揮しているのです。スポーツ少年団活動のように大人に管理されている場面ではどうか？と考える方もおられるでしょうが、私の観察や子どもとの会話からすると、そのような状況でも子どもたちのこの創造力は日々見受けられるというのが私の結論です。（この点についての説明は今回は勘弁してください）

それでは、在宅個人型の子どもはどうでしょうか。ファミコンキッズを追っかけてみると、彼らのテクニックの凄さには驚くばかりです。指先のテクや文字認識の能力（一瞬のうちに現れては消えてしまうテキストを瞬時に読んでしまうのです。彼らは文字を映像として認識しているようです。）も私より遥かにすごいです。遊び方も個々人でいろいろ考え方工夫しているし、友達との情報交換によって、幅広い楽しみ方を知っています。

この様に、私が出会った子どもたちは、大人の心配をよそに結構楽しんでマジになっているし、マジになろうと創造力を働かせています。確かに何らかの価値尺度を持ってきて子どもをみれば様々な問題があることは事実ですし、問題だなあと感じるところもありました。また、私自身マーガレット・ミードの言う逆社会化をオプティミスティックに考え、子どもの現状を無批判に受け入れようとも思いません。ただ、子どもたちの追っかけをしているものとしては、子どもたちが個々の活動で発揮している素晴らしい創造力とその集積である知と技を大切にするところから子どもたちの問題を考えいくことも大切だと感じています。

「もう1つの世界」とスポーツ社会学へのスタンス

松田恵示（大手前女子大学）

あの阪神・淡路大震災から、もうすぐ1年が過ぎようとしている。地震で倒壊したぼくの勤務する大学も、着々と新しい校舎の建設が進んでいる。いまだ仮設の研究棟ではあるけれども、ほぼ日常生活は普段に戻った。もっとも、この間の経済的な負担から、サラリーや賞与の幾つかのカットがあるのではという恐ろしい噂には、今もさらされているのだけれども。

しかし、震災当日からあの1週間に体験した出来事は、夢の世界へと還元されつつあるように見える今でも、やはりそこには回収し尽くせない「生々しい」現実として、つい思い出されてしまう。「壊れる」とか「倒れる」という言葉が、どのような意味でも関係づかなかった電車や高速道路の高架が、いつも歩く歩道の上に現実に横たわっている。倒れた家のすみの方に、毛布で無造作に包まれた遺体が置かれている。見慣れた町の風景が、本当に映画の1シーンのように、まるで別世界のものであった。緊急の避難所となった大学の体育館では、検死のため別な場所に遺体を移動するという手伝いをした。重たかった。無気質な肉体があんなにも重たいものだということを、まさかこの身体で体験するとは思ってもいなかった。

ところで、こんな日常からは超絶した日々の体験のうちに、漫然と、しかしさっかりとした確信を持って感じていたことがある。それは、ゆるぎない「確かさ」を持って存在していたぼくたちの日常生活が、じつは、死を含む極端な「不確かさ」に取り囲まれていたのだという実感だった。この意味で、地震のあとしばらくの間は、被災地域から外へでたときに広がっている「いつもの日常生活」が、1つの虚構としてしか感じられなかった。それはとても奇妙な感覚だった。地震はあきらかに、日常というルーティーンにポツカリ穴を開け、「驚愕」とか「戦慄」とか「畏れ」といった言葉が含み持つある種の感覚に性格づけられた「もう1つの世界」を垣間見させてしまったのだと思う。そして、いわゆる現実とは、日常生活の世界と同時に、この「もう1つの世界」にも根拠を持つのではないかという直感が、あの出来事を夢の世界へと回収し尽くせない原因になっているのではないかと、ぼくには今思われる。

それにしても、こうして日常がひび割れたその瞬間に、日常の研究対象として扱ってきたスポーツという現象が、思わずところで姿を現わしたことには本当に驚いた。それは地震があった2日後の、大学近くの全壊した家の出来事だった。花が捧げられたその廃墟を利用して、子どもたちがサッカーを楽しんでいたのだ。整えられたグラウンドで行なうサッカーに対して、そこでのサッカーは、家の残骸が適当な障害物となって、思わず面白さを生み出していた。このときに感じた子どもたちの、そしてそこで興じられた遊び=プリミティブなスポーツの持つ「凄さ」と「恐さ」は、かなりの衝撃を与えるものであった。日常では、このようなプリミティブなスポーツを「笑い」や「気楽さ」の相のものに受けとめることが一般的であったから、このようなスポーツが、その対極にあるかのように思われる「もう1つの世界」にも通底していたことをこのとき発見し愕然としたのだった。日常生活の世界と「もう1つの世界」の2重性を同時に根拠とすることこそがもし現実に内属するということの中身であるとすれば、プリミティブなものでさえも、確かにスポーツは、生の現実に全的に深く関わっている。

こうして考えると、まったく飛躍してしまうけれども、かのホイジンガが、人間の生の本性を「ホモ・ルーデンス」として捉えたことは、まったく卓越していたと改めて感心するほかないよう思える。カイヨウによって「聖」との混同を批判されたけれども、彼はこの「もう1つの世界」の質感に表現を与えるために、あえて「遊」という概念にそれを内包させたのではないかと思う。

「文化は遊びのなかに遊びとして展開する」という彼のテーゼも、我々の思考の中では無視されがちな、日常生活の世界と「もう1つの世界」とから成る生の現実の重層性を指摘するものであったのではないか。なにも地震といった突発的な災害にのみたよらなくとも、遊び・スポーツという主題の中で生の重層性に気づき、生の意味や価値を味わうことが少なくとも可能なのであるまい。やや強引ではあるけれども、地震を経験したことにひきつけて述べると、ぼくはこのようないいメッセージを今、ホイジンガから受けとっている。

この点からすると、遊び・スポーツを探求することは、そのように生の現実に全的に関わる遊び・スポーツの意味や価値を探すことと、それを十全に開花させる条件を考えることが主要な課題として浮かび上がってくる。いわば、日常生活の世界として遊びやスポーツを客観的、分節的に生の現実の外部（冷たい言葉）から把握するというよりも、あるいは日常生活の世界をよりよく知る実験場としてそれを位置づけるというよりも、生の現実の内部にとどまり、生の現実の重層性により繊細に馴染んだり創造力を与えられるようなあたたかい言葉を遊びやスポーツについて生み出すという作業である。そのような作業は、しかしあまりにも「確かにない」言葉探しであり、その意味で（遊び・スポーツの）「思想」と呼ぶしかないだろうと思う。だが、少なくとも遊び・スポーツという文化の側に立つ「体育学」という視線からは、このような「思想」を抜きにした作業は考えにくいし、この意味でスポーツ社会学においても「体育学」の視線からすると、このような「思想」を欠いた研究はあまり生産的ではないように感じられる。もっとも、このような視線とそうでない「確かにない」視線は、やがては浸透し合い統合されていくことになるとも同時に思うのだけれども。

しかし、この「確かにない」視線との統合という事態は、「確かにない」視線にとっても飛躍的な進歩であるのだろう。だが、「確かにない」視線をフォローすることは、ぼくにとってそれほどたやすいことではない。あの地震に垣間見たり、遊び・スポーツに感じる「もう1つの世界」の実感をたよりに、「確かにない」視線と「確かにない」視線のはざまの中で、スポーツ社会学に接していくないと、ぼくは今考えている。

リプライ

吉田さんの研究通信にコメントする

清水 諭（筑波大学）

吉田さんの研究通信（日本スポーツ社会学会会報 第11号）の中で私の論文に対して誤解されていると感じた点があったので、敢えてここに述べることにした。スポーツ社会学者の独自のアイデアとは何か、そして、その研究の基盤としての認識論をいかに考えるか、さらにスポーツ社会学という「界」についてである。

1. スポーツ経験を身体にたっぷり吸い込んだ研究者のアイデアとアカデミズム

言語にならない感覚的世界で、ボールを打ったり、走ったりするトレーニングを積み重ね、運動部という独特の世界で数年間過ごしたことがある研究者にとって、そこに浮かび上がる問題は、確かに他の領域にないアイデアを持ち得る。しかしながら、これまで自らの経験を土台にした「身体」についてスポーツ社会学者が語ってこなかった、あるいは、語ることができなかつたのはなぜか？ここには、スポーツ社会学の認識の諸前提という点で大きな問題が含まれているように思う。

すなわち、スポーツ科学を打ち立てようとしてきたかに見えるスポーツ社会学（その前身は、「体育社会学」）という独自の領域も社会科学のパラダイムの潮流に大きく左右されてきたことは認めざるを得ない事実であり、このパラダイムを無視してスポーツ社会学の研究を進めることは不可能であるということだ。例えば、これまでのスポーツ社会学において、社会学で展開してきたのと同じように古くはパーソンズや構造・機能主義といったパラダイムが確かに存在してきた。このような認識の前提を無視しては、いかなるスポーツ社会学の研究も存在しえなかつたと考えられる。それは、スポーツ社会学が社会学の特殊的、専門的な領域であるとか、スポーツ科学を打ち立てるとか言った問題以前の、アカデミズムの中で議論をしたり、論文を書いたりする際には不可欠の状況なのだ。

私が「身体の社会学を構築する意義とその可能性」（体育学研究38,1-11,1933）を書いたのは、まさに言語／非言語、意識／無意識といった社会科学の根本問題を問い合わせ機運の中で、身体そのものを使ってスポーツを体験した研究者が、その身体を基盤にしてこれらの根本的な問題に大きな貢献ができる、あるいはスポーツをする者の組織や階級を身体の視点から考察することでこれらの問題に大きな寄与ができる可能性を見て取ったからだ。そのこと自体そんなに大げさなものとは思わないが、今こそ身体を基盤にして活動してきた研究者が真剣に論議をしていく時だと考えている。

しかしながら、この時に身体についての思考の系譜をまとめずして、またそこに述べられてきた問題意識に触れずして、つまり、身体が社会科学の中で語られているコンテキストをぬきにして議論を始めることになれば、「スポーツ社会学的身体の問題」といったような、これまでに見られたような「スポーツ（体育）社会学」の中だけでその問題を部分的に切りとつて論議する形になってしまう。（例えば、吉田さんは研究通信の中で佐藤郁哉氏の方法論や桐田克利氏のフレーズを引用しているが、これらの方がどのような系譜で論文を書いたのかについて、そのコンテキストに触れようとする気配が感じられない。）身体の問題は、スポーツ社会学者だけのものではないし、様々な研究者が議論をする深くて広い問題であることは周知のことだ。スポーツ社会学であるとか、社

会学であるとか、いや哲学、歴史学、文化人類学、心理学の領域を飛び越えた問題である。そのような身体をテーマとした超領域的なものの中で、スポーツの経験をもつ者の研究が重要な視角を提示するはずだ。その意味で、身体的な経験をふまえたスポーツ社会学者たちが独自の課題として「身体」の問題に取り組み、そこで斬新なアイデアを出していくことが大きな意味を持つと考える。

ここまで述べてきてわかるとおり、私はスポーツ社会学がスポーツの科学として独自の領域を打ち立てるという理想をひとまず捨て去った方がいいと考えている。スポーツの科学を打ち立ててその中で論議していくことに対する閉塞感を抱いていることはもちろんだが、まずは、社会科学の研究者とスポーツを身体に深く刻み込んでいる研究者とが大きな土俵の上でお互いに刺激し合うことが重要であると思う。それは、社会学のコンテクストをしっかりとふまえた上でスポーツを論じるということでもあるが、身体という大きくて深いテーマを抱えることで、身体を媒介にした超領域的な身体文化論といった方向性の中で様々な研究者と論議をしていくことにつながると考えている。

以上、吉田さんがスポーツ社会学における課題とその認識論的背景についての問題を先の研究通信で触れたがっていたのではないかと推測して述べてみた。

2. スポーツ（体育）社会学「界」研究者の身体性を考える

私の論文は、以上のような観点で読んでいただければ特に「スポーツ社会学者独自の課題」について論議するものでもないし、「身体の問題」をスポーツ社会学者が独占しようなどといったことを考えているものではないことを、はっきりと読みとれるとと思う。ヘニング・アイヒベルグの身体文化論についてもその訳本を出版する予定でいるので、それを充分読んでいただいた後に私が無批判に引用しているかどうかを批判していただきたい。

さて、吉田さんの先の研究通信から私が思い浮かべたことは、「スポーツ（体育）社会学」という「界」における研究者の身体性だった。「身体の問題」以外はスポーツ社会学に非ずといふのか？これ以外の課題を追い求めるスポーツ社会学者はマージナルだといふのか？」という吉田さんの言説は、私の論文中の「スポーツ社会学の中心を構成するもの・・・」という表現に対してのものであろう。もちろん、私はある問題を取り上げると中心的なスポーツ社会学者になり、それを取り上げないとマージナルになるといったようなことを言っているわけではない。

しかしながら、スポーツ社会学の「界」のなかに中心と周縁、あるいは、研究（者）の中でヒエラルキーが存在することについて危惧を抱いていることは事実である。そして、スポーツの制度や組織の特質として、ヒエラルキーを生み、記録と業績によって上下関係が作られていくことを体現してきた研究者たちがこれまで作ってきた「スポーツ（体育）社会学」という「界」の中にこのようなことが存在していないとは言い切れない現実を見据えれば、なおさらこの感を強くしている。自由奔放で魅力ある研究や議論を生み出すために、我々研究者は自分自身の身体性を見つめ、閉鎖的で中心と周縁の位置関係、あるいはヒエラルキーを作り上げてしまいがちなその身体こそ脱構築していくかなければならない。

海外学会通信

国際スポーツ社会学会シンポジウムの報告

小椋 博（香川大学）

1995年7月19～22日まで、イタリアのローマで開かれた国際スポーツ社会学会シンポジウムの模様を報告する。

会議はイタリア・オリンピック委員会が運営する、SCUOLA dello SPORT（スポーツのドキュメンテーションセンターとスポーツ学校を兼ねたような機関）で、そこにほとんどの参加者が宿泊しながら、研究発表が行われた。参加者は21か国から約140人、3題の基調講演と、計47題の発表（7つのセッションに分かれて行われた）、それにその他の情報交換の場があった。

シンポジウムのメインテーマは「スポーツ：社会問題、社会運動」で、私は現在の国際的なスポーツ社会学研究の場で、何が社会問題として認識され、どんな社会運動の展開があるのかに興味を持ち、遠路参加した。基調講演の発表者と演者、それに各セッションごとの一般発表数は以下の通り。これでおおよその傾向は理解できるのではないかと思われる。

基調講演

- (1) G. ジャービー（スコットランド）
「無秩序化社会におけるスポーツと社会問題」
- (2) N. セーバージ（アメリカ）
「スポーツと社会運動」
- (3) A. ダル・ラーゴ（イタリア）
「スポーツ社会学の方法的革新」（ただしこれは本人の都合により、取消し）

一般発表

セッション名	発表数
(1) スポーツのグローバル化と地域の反応	5
(2) 民族のアイデンティティ／暴力・人種差別	8
(3) スポーツ・環境・運動	6
(4) ジェンダーと性	7
(5) 階級・年齢・能力差とスポーツフォアオール運動	6
(6) スポーツする身体：人間能力の医療化と科学化	8
(7) その他	

研究の傾向については、基調講演でも、あるいは一般発表でも理解されたように、スポーツのグローバル化と民族のアイデンティティ、スポーツと環境、それにスポーツフォアオール運動等が現在の問題として強く意識されていたと言える。勿論暴力やドーピングの問題もあったが、スポーツにおける民族的アイデンティティや南北問題に关心が集まっていた。暴力の問題も階級のアイデンティティから理解しようとしていたようで、ここでもスポーツとアイデンティティの係わりを問題

にする姿勢が見られた。

研究の質に関しては必ずしも大いに刺激的であったというわけではなかった。そのなかでイギリス及びスコットランドのダニングやマグアイヤーのグループ（フィギュレーション社会学に基づく研究グループ）が行った計5題の発表（発表セッションは異なっていたが）は、エリアス社会学に基づいた、きっちりまとまった研究として参考になった。このシンポジウムがヨーロッパで開催されたことから、フィギュレーション社会学以外に最近のカルチュラル・スタディーズの視点からの研究も期待されたが、どういう訳か無かった。またヨーロッパ同様、スポーツ社会学研究が盛んな北米からの参加も今回は非常に少なく寂しかった。参加者はヨーロッパからがほとんどで、それに一部のアジアからの研究者（韓国からの研究者は大変積極的で、人数も多かった。）といった具合で国際シンポジウムにしては物足りなかった。今後はスポーツ社会学研究のヨーロッパ・アメリカ地域以外への広がりが真剣に検討されなければならないように思われた。

スポーツと環境は一昨年のこのシンポジウムでも取り上げられた。一昨年も参加した松村氏（筑波大学）によれば内容的にはさほど変化は見られないということであった。

イタリアでのシンポジウムということで、全体的な印象は大変リラックスした会議で、発表が大幅に遅れたり、説明なしに取り消されたりした。イタリアの赤ワインを振る舞われてそんなことに不平を言う人もいなかった。

最後に、我々日本のスポーツ社会学研究者はこの種の国際的な会議やシンポジウムに積極的に出席して、日本の研究の紹介と意見交換をもっとやるべきではないかという印象を持った。研究の国際的孤立化を避けたい。

会員の動静

(1995年10月現在)

〈新入会員〉

中塚義実（筑波大学附属高校）

久保和之（中京大学大学院）

〈住所変更〉

編集後記

日本スポーツ社会学会会報の第12号をお届けいたします。前号は編集作業に不慣れであったため、今回は事務局長であった故多々納会員の急逝という事情のため、大幅に発行が遅れてしまいました。会員の皆様には、ご心配やらご迷惑をおかけしたことと思います。何卒ご寛容ください。

理事会報告にもありますように、故人の遺志を、学問上の仲間であり、また好論敵でもあった、三本松正敏会員に引き継いでいただくこととなりました。三本松会員には、会報の編集方針等を含め、新事務局長としての抱負を次回会報で語っていただく予定です。

「能なし」ではありますが、事務局員一同、微力ながら会の発展のために努力を惜しまない所存です。会員の皆様方の、なお一層のご協力をお願い申し上げます。

(Yamanori)

〈住所不明〉

★上記会員の住所をご存じの方、事務局までご一報ください。

〈退会〉

池田 勝、宇野啓一、及川好司、日々野朔郎、藤田千鶴子

日本スポーツ社会学会会報 第12号

発行：日本スポーツ社会学会事務局

〒816 福岡県春日市春日公園6丁目1番地
九州大学健康科学センター内
Tel:092-573-9611(709 : 山本, 720 : 吉田)
Fax :092-592-2866
E-mail:yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp

郵便振替口座番号 : 00390-0-43962
加入者名 : 日本スポーツ社会学会事務局

スポーツ・レジャー社会学

オールターナティヴの現在

デービッド・ジュリー／ジョン・ホーン

清野正義／山下高行／橋本純一 編著／A5版334頁、定価2900円

——今日、私たちの生活のなかで、スポーツやレジャーの占める比重が圧倒的に高まってきている。生活世界におけるスポーツ・レジャーの位置や意味を多方面から分析し理論構築を図ることは、日本はもより、世界的にもみて社会学上の課題となっている。それは、多様な意味と重層的構造を持つに至っている現代社会におけるスポーツ・レジャーの分析のために、より一層深められた理論ツールを持つ必要が生じてきているからに他ならない。

本著での私たちの試みもこのような流れのなかに位置している。イギリスの気鋭の社会学者、デービッド・ジェリー、ジョン・ホーン両教授を迎え、日英の研究者によるイギリス、フランスを中心としたヨーロッパの理論社会学の批判的検討という共同作業を通じて、スポーツ・レジャーに関する分析の深まりと理論構築の新たな展開をめざしたものである。

(「編者あとがき」より)

[主目次]

序章 イギリス・スポーツ・レジャー社会学と日本の研究／山下高行・清野正義

I プリティッシュ・カルチャラル・スタディズとスポーツ・レジャー研究／ジョン・ホーン

II ヘゲモニー論とスポーツ社会学研究

1 「スポーツとヘゲモニー」論の地平／橋本純一

2 ポスト・フォーディズムのもとでのスポーツ・レジャー／山下高行

III ピエール・ブルデューとフランス・スポーツ社会学

1 ブルデュー社会学とフランス・スポーツの研究／三浦弘次

2 ブルデュー社会学とスポーツ研究の可能性／棚山 研

IV スポーツとレジャー研究におけるフィギュアレーション社会学再論

／デービット・ジェリー&ジョン・ホーン

V 「企業社会」日本のレジャーとスポーツ／川口晋一

VI 労働時間、スポーツ、空間／清野正義

終章 スポーツ・レジャー社会学における理論および方法論の新たな方向性

／デービッド・ジェリー&ジョン・ホーン

山口 修・齋藤和枝編

比較文化論

異文化の理解

さまざまな視点から「異文化」への知的・学際的なアプローチを試み、さらに具体的な文化比較を通して「異文化」のとらえ方を考える

四六判／270頁／1950円

文化装置としてのスポーツが発信するさまざまなメッセージを読み解き、日常生活におけるスポーツのリアリティに迫ったユニークな現代文化論
四六判／256頁／1950円

杉本厚夫著

スポーツ文化の変容

多様化と画一化の文化秩序

小椋 博・江刺正吾編 高校野球の社会学 一九五〇円	黒田浩一郎編 スポーツの社会学 一九五〇円	高畠由起夫編 現代医療の社会学 一九五〇円	井上俊編 性の人類学 一九五〇円	有山輝雄・津金沢聰広編 現代文化を学ぶ人のために 一九五〇円	秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎編 生態人類学を学ぶ人のために 一九五〇円
---------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	------------------------	--------------------------------------	--

●日本の現状と課題
サルとヒトはどう違うのか——靈長類学と人類学
がフィールドの成果をぶつけあい、性の謎に挑む
視点から捉え、社会学的考察を加えた意欲的論集

映像、文学、音楽、電話、旅行、スポーツ、医療、
恋愛等、多彩なテーマを通して現代を読み解く
メディアの諸相をライフサイクルの視点から解説
し、現代社会とメディア文化のかかわりを考察

人びとは、自然とどうつきあってきたのか——
間と環境との根源的なかかわりを聞いたのか——
人

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56
TEL075(721)6506<税込定価>